わだい

DVD「医療用語を日本手話で ～医療従事者とろう通訳者の協働～」の制作に関わって

その1：手話とはどういうものか

学校法人明晴学園中学部主任教諭
ろう通訳者養成講座第一期修了生（NPO法人手話教師センター）
小林雅和（こばやし まさかず）
Masakazu KOBAYASHI

I. 日本手話を母語とした日常生活

手話を母語として日常生活を送るということを、読者の皆さんはどのように思われるだろうか。

まずは、日本手話の話者が誰なのか明確にするために、ろう者について述べたい。ろう者は一般的に聴覚障がい者と呼ばれることが多い。国内外問わず、聴覚障がい者はおよそ1,000人に1人の割合で誕生すると言われている。そのうち約9割は聴者の両親のもとに生まれる。一方で、残りの約1割はろう者の両親のもとに生まれ、家族全員がろう者であることを「デフファミリー」と呼ぶ。そういった家庭で、両親の手話を見て育ったろう者の第一言語（母語）は手話である。

私事で恐縮だが、私の両親と兄もろう者であり、私はデフファミリー出身である。日本手話を母語として育った私の視点から、聴者とろう者のコミュニケーションにおける文化的な違いについていくつか共有したい。

まず、一般的に聴者は、自らの感情を伝えるときは声のトーンや大きさ、高低、テンポなどで、音声をもとに表現をしているだろう。個人的な感想だが、聴者の場合、わざわざ目を合わせなくても、音声だけで十分にコミュニケーションしているように思える。しかし、デフファミリーで育った私にとっては、アイコンタクトが重要であり、相手の目を合わせるように手を上下に振り、相手と目が合ったことが確認できてから、お互いの顔を見ながら話すことが鉄則である。また、聴者が声のトーンなどを使い分けながら感情を伝えている部分について、私は幼い頃から両親が表情を豊かにしながら体全身を使って、手話で論理的思考を並べたり、感情や気持ちを伝えたりする姿を見てきた。嬉しい時は笑顔で、怒っているときは眉をひそめたりするなど、言葉と表情を一致させ、共感できることは「頷き」や「相槌」をしながらその時の情景をありありと伝えていた。一方、聴者の感情は声で判断することが多いため、表情と話していることが一致しないことがあり、表情を大切にするろう者である私に時々戸惑いを与えるが、同じ日本人であるにも関わらず、このような違いが顕著に表れているのは興味深いことでもあると思う。

また、聴者は相手に声をかけたい時、声を出して名前を呼ぶだろう。ろう者の場合は、音声での声がけは意味がないため、机をバンバン叩くことで振動を作ったり、電気をつけたり消したりすることで視覚的にわかりやすくするようにしたりと、ビジュアルを重視した行動をする。

このように、視覚的な行動は、家族間のコミュニケーション構築にも影響する。そのエピソードとして、幼稚部の時に双子の兄と喧嘩をしたときのことを例として挙げたい。口喧嘩（むしろ手話喧嘩？）をし、私が兄の頭をおもちゃで叩き、頭から出血してしまった時のことである。聴者の場合、おもちゃで強く叩いた音や、いつもとは違う泣き声で親はすぐに子供のところへ駆けつけるだろう。しかし、私の両親はろう者であり、物音や泣き声には気づかない。そのことを幼いながら兄も理解していたのか、まずは泣きながら親を探しに行き、親を見つけて、必ず目を合わせてから私にされた出来事を伝えていた。

さらに、私は幸いなことに幼い頃からろう者のコミュニティへ参加していた。北海道出身である両親は、地元から都会に出たろうの友人達との集まりや、住んでいる地域の手話サークルに参加するなど、日

常生活のなかでろうコミュニティに参加し、私も小さい時からその場によく連れて行ってもらっていた。そこで集まるろう者の人々の話題は非常に幅広かった。子育てや政治、経済、老後など生活における情報交換だけではなく、聴者が多数占める社会の中での生きづらさや、ろう者に対する理解の無さに対する愚痴など、ろう者同士でしか分かり合えないこともお互いに吐き出す。共感できるあまりに、つい話が盛り上がってしまい、話すことに熱くなると手話のテンポも速くなり、机の隅に置いていたコップに手があたって水がこぼれてしまうということがよくあった。そういった光景は、手話で話すことによって起きうることで、ろう文化の象徴と言ってもいい。その時は、コップをこぼしたためにすぐに掃除をしなければ、という焦りというよりも、むしろ「またいつものことか、ろう者のあるある行動だよね。」とみんな笑っていた。幼かった私は、大人のろう者がどのような話を繰り広げているのか当然理解できず、眺めるだけだったが、彼らの豊かな表情と多様な手話表現から、心地よい瞬間を過ごしているのだということはわかった。

このように両親のやり取りや行動を、物心のついた頃から私は見て育った。その過程で、日本手話とその背景にある「目で生きる術」、つまりろう文化を自然に身につけ、幼かった私も小さくて拙い手の動きと表情で自分の気持ちをいつの間にか手話で言語化するようになっていった。

Ⅱ. ろう者のコミュニティのきっかけ

手話を知らない聴者の多くは、手話を世界共通だと思っているようだ。しかし逆に問いたい。皆さんが一般的に使用している日本語のような音声言語には、世界共通言語があるのだろうか、あるいは音声言語を世界共通に作り上げることは可能なのだろうか。

音声言語でも世界共通言語を作り、世界中の人がそれを用いることが困難なのと同様に、手話は世界各地のろう者の集団、コミュニティの中から自然に生まれて培われた言語で、地域的、文化的な違いがあるため、世界共通ではないことをご理解いただきたい。

ご存知の通り、音声言語には、日本は日本語、アメリカは英語、フランスはフランス語という数万年かけて土着した固有の音声言語がある。皆さんが話されている音声日本語にも、日本の文化的な背景がある。また、同じ英語圏とはいえ、地域的・文化的な違いによる影響で、アメリカ英語とイギリス英語がある。手話も同様に、日本は日本手話、アメリカはアメリカ手話、フランスはフランス手話、イギリスはイギリス手話のように異なっている。つまり、手話は世界共通ではないし、今後も音声言語と同様に世界共有言語に作り上げることは不可能なのである。

さて、デフファミリーの元に生まれたろう者は両親の手話から学ぶことができるが、聴者の両親の元に生まれたろう者はどのように手話に出会うことができるのだろうか。彼らが手話と出会う上で重要となる場が「ろう学校」である。

ろう者への教育は明治以前の寺小屋にもあったが、日本におけるろう学校の発祥は、1878年に設立された「京都盲唖院（現：京都府立聾学校）」である。そののち、1888年に「楽善会訓盲院（現：筑波大学附属聴覚特別支援学校）が設立された。次第に、日本各地にろう学校が次々と開校され、ろうの子供同士が集まるようになったことで、ろう者のコミュニティが生まれた。その後、大正期に入るまでは手話を用いた教育方針があり、そこで目を通して交わされるコミュニケーションの過程で、日本手話は広まってきたのである。

このようにろう学校は、点在したろう児が集まり、手話を習得・継承する代表的な場の一つであるといえる。冒頭で述べたように、聴覚障がい者のおよそ9割は親が聴者であるため、彼らは生まれた時から聴者の両親の価値観やそれに基づく環境に育てられるが、ろう学校で初めてデフファミリー出身のろう児に出会うことができることもある。また、ろう学校は乳児から高等部まで一貫していることが多く、運動会や文化祭などの学校行事だけではなく、普段の学校生活においても通学路や全体朝礼も一緒であるし、食堂で一緒に昼食を食べることもある。歳が離れていても手話で気軽に話すことができるので、ろうコミュニティや手話が自然に継承されるのだ。また、校内だけではなく、スポーツ大会など他のろう学校との交流もあり、それらを通してろう者のコミュニティが広がっていく。

しかしながら残念なことに、日本には口話教育を

強制的に徹底していた時代があった。それはろう者と聴者との間のコミュニケーションを円滑にし、聴者が大多数を占める社会にろう者が溶け込むため、とも採れる。しかし、聴者と同様に音声でのコミュニケーションをすることはできないにも関わらず、1930年代に始まった口話教育の強制は、ろう者の母語である手話を禁止し、これまで述べてきたようなろう者独自の文化を否定してしまうようなものであった。この強制的な教育がようやく是正されたのは1990年代になってからである。ろう者の自然言語である手話の権利を奪っていた歴史もあったということを皆さんには覚えていただきたい。

ろう者のコミュニティは、ろう学校卒業後も続く。卒業後、私の両親のように、ろう者同士で集まって話したり、聴者が多数占める社会に出ることで立ちはだかる差別に対するもどかしさから、ろう者の日常生活の質の向上を求めて、ろう者協会を設立したり、共通の様々な趣味のグループを作ったりと、ろう者のコミュニティが拡大され、生活様式、行動様式、規範や価値観を共通することで、日本手話はより一層継承されている。

Ⅲ. 日本手話の方言

「聴者のコミュニティの中で発生した音声言語には、同じ国とはいえ、地域によって様々な方言が存在するのと同じように日本手話にも方言がある。大きく分けると関東方言と関西方言がある。」（木村晴美、岡典栄ら）[1]。たとえば、関東をはじめ多くの地域では「名前」という手話は書類に拇印を押すしぐさを表す一方で、関西では胸に名札を付けた形で表現されるように表現が異なる[1]。

その他、個人的に知っている手話の方言の一つに、「試験」がある。関東では、両手の親指を人に見立てて、上下に競争するしぐさを表現するのに対して、大阪では両手に拳を握って、手首の周辺に合わせてひねるという顕微鏡のように見立てたしぐさを表現する。また、「水」という手話も関東と大阪では表出方法が異なる。関東では、水が流れる様子を表し、大阪では「水」という手話は片手を顎に近づけて水をすくって飲むしぐさの形を表す。興味深いことに、私の両親の出身地である北海道でも、「水」という手話は、関東と大阪の表出方法と異なる。北海道では、小指のみ立てて、口の前を左右に動かすことで、「水」と表す。

このように、地域によって手話表現が異なり、方言がある。また、狭い地域内で発生し、そこでしか使われない手話もある。その例として、瀬戸内海に浮かぶ愛媛県大島にある宮窪地域の手話が挙げられる[2]。そこは比較的小規模のコミュニティで、ろう者と聴者という分け隔てなく、宮窪手話という共有手話を使用して会話している珍しい地域である[2]。宮窪地域は古くから漁業が盛んで、漁業に携わるろう者・聴者の島民が船の上で作業しながらやりとりできるように発祥したのがきっかけだと言われている[2]。このように島民同士、同じ狭い地域内で情報を共有できるように、無意識のうちに工夫して成立した地域独自の手話もある[2]。

Ⅳ. 視覚言語と音声言語の違い

島国である日本は、単一民族国家と呼ばれており、国語である日本語さえあれば通じ合えるといった風潮があるように思う。日本人＝日本語を話す人というように、当たり前のように捉えているため、わざわざ詳しく言わなくても伝わる、空気を読むなどお互いの文脈（言語や価値観、考え方）が非常に近い状況でお互いに相手の意図を察し合うことでなんとなく通じてしまう、という風潮が音声日本語にはある。いわゆる阿吽の呼吸のようなものである。視覚言語である手話で育った私の立場からすると、音声日本語は「察する言語」であるように思える。

聴者は家族、学校、職場、公共施設や公共交通機関など、日常生活の中で数えきれないほど様々な音や情報が溢れる中で日常生活を営んでおり、一日中、本人が無意識のうちに自然に耳に入っている。また、声のトーンによって、実際は腹が煮えくり返るほど怒っていても表面上は笑顔でやり遂げてしまうという、声と表情が一致しないケースが多くある。わざわざ口で言葉にしなくても、意図的に声のトーンを変えたりすることで、周囲の人たちはなんとなく雰囲気で了解しているものである。そうした暗黙の了解というものが、日本人のコミュニケーションには根付いており、お互いに相手の意図を察し合うことで、なんとなく通じてしまうハイコンテクスト文化を基盤に生活している。聞き手の想像力に委ねる部

分があってこそ、察したり、気を遣ったりするという日本の美点が生まれ、それ以外にも「奥ゆかしさ」や「間接的な表現」という日本語独自の習慣もある。しかしながら、ろう者は耳に入ってくる情報が聴者と比べて格段に少ない。自ら直に目の当たりにしないと、情報が入ってこずにシャットアウトされるため、聴者と比べて偶発的に情報が入る機会は全くない。そのため、ろう者は見たものをありのままに手話で言語化する。そのため、「察しの言語」が多数派である日本人聴者とのやり取りの中で、お互いの意図が通じないという問題が、ろう者と聴者の間におけるコミュニケーションで多く起きる。その代表的な例を一つ挙げる。

授業で、先生から「宿題はもう終わりましたか？」と言われた時、一般的には先生のところへ行って、宿題を提出したりするだろう。しかし、ろう者の場合、「終わった」と言いながら宿題を取り出して、宿題が終わるまでどのように大変だったのかなど状況をより丁寧に細かく報告し、話が終わる頃にやっと目的である提出をすることが多い。逆に「宿題をだしてください」とダイレクトに指示があると、その言葉の通りに受け止めて、すぐに宿題を取り出して提出する。このように、「宿題はもう終わりましたか？」と言われた時点で、聴者は宿題を提出するタイミングと察し、宿題を提出するが、ろう者は「もう終わりましたか？」の言葉をそのまま受け止めて、終わったのか終わっていないのか、またその状況を説明するという、聴者から見たら手間のかかる会話が、文化的な特徴として顕著に表われるのである。

V. 日本語対応手話と日本手話の違い

日本手話は、日本語とは異なり、れっきとした自然言語である。音声日本語の文法に従って手を動かす、いわゆる「日本語対応手話」というものがあるが、これは本来のろう者の母語である手話とは言えない。なぜなら、日本語対応手話は聴者がろう者と話をするために作り出したものであり、日本語を声に出しながら、日本語の単語を単に手話に置き換えていくだけの作業であるため、上記で述べたような聴者の「察する」文化的な背景が根付いているからだ。さらに、聴者は、音声を聞いて中身を理解できるが、日本手話とは語順などしくみが違うので、日本語の単語通りに配列しているだけでは手話としては読み取れず、分かりづらいことが多い。頭の中でいったん、日本語の文章に組み立てて日本手話的なニュアンスに翻訳するという再構築が必要であり、日本手話を母語とする立場としては、日本語対応手話を読み取って理解することは非常に手のかかる作業なのである。

日本手話には、NMM（Non-Manual Markers: 非手指要素）、CL 表現、R S（ロールシフトまたはレファレンシャル）などの文法構成が重要である（松岡和美）[3]。松岡によれば、NMM とは、手や指以外のさまざまな動きのことで、表情やうなずき、目の見開きや細め、眉上げや眉寄せ、舌出し、顎、頬などの動きをさす。また、CL 表現とは、「物の動きや位置、様子、形や大きさなどを手の動きや位置、形に置き換えて表現」するものと定義され、RS とは、ロールシフトまたはレファレンシャルシフトと呼ばれ、話者が「現在の自分」以外の人物の考えや行動を引用して伝える表現である[3]。

特定非営利活動法人インフォーメンションギャップバスター主催の DVD「医療用語を日本手話で」（**写真 1**）[4] に収録されている映像の一部から、例として日本手話と日本語対応手話の違いを紹介し、いかに日本手話が視覚言語使用者であるろう者にとって自然言語であるかを述べたい。

「腸閉塞が起こることがあります。」を日本語通りに手話で表出（日本語対応手話のように）すると＜腸 / 閉 / 塞 / 起きる / こと / ある＞となってしまう。それだと、腸がいきなり閉じて塞いでしまうことしか伝わらず、なぜ身体の中でそのようなことが生ずるのかという過程などは理解ができず、想像もつかない。一方、日本手話で表出する場合は、＜弱い / 腸 / 詰まる / 場合 / ある＞となり、腸の様子を具現化しているため分かりやすく、より自らの健康状態が危険であることが自覚できる（特定非営利活動法人インフォメーションギャップバスター Web サイト内の動画 2:56 ～ 2:59 の部分 URL:https://www.infogapbuster.org/?p=3828 2021 年 7 月 15 日閲覧）。また、「胃カメラ」＜胃 / カメラ /（口から入る動作）＞、「大腸カメラ」＜大腸 / カメラ /（お尻から入る動作）＞の場面も、どこからどのように入るのか、具体的に口やお尻から入るという実際の様子を表出することが大事である。そのような情報もないまま、

写真 1　DVD「医療用語を日本手話で ～医療従事者とろう通訳者の協働～」のジャケット部分
（写真提供：特定非営利活動法人インフォメーションギャップバスター）

音声言語の「カメラ」（カメラで人や風景などの写真を撮るような様子）で手話を表出されると、意味が全く異なる。その結果、胃や大腸の状況をカメラでどのように入れて検査を受けるのかイメージができないまま、検査を受けて初めて方法を知る、という行き当たりばったり的な状況になってしまう恐れがある。

このように、日本手話は、上記で述べたようなNMM、CL 表現、ＲＳなどの文法要素が重要な役割を果たしている。手話は手先のみで使用するコミュニケーションである、と思われることが多いが、ただ音声言語の単語を単純に手で表すだけでは、日本手話の話者には伝わらないということをご理解いただければありがたい。

おわりに

聴者はろう者を「気の毒だ」、「大変だろう」と、「聞こえている」ことが幸せであるというものさしで評価しがちであるが、それはあくまでも聴者の価値観である。確かに病気や加齢に伴って聴力が低下した「中途失聴者」や「難聴者」は、今まで当たり前のように聞こえていたことができなくなることで不自由さを感じる人もいるかもしれない。しかし、皆さんが生まれてからずっと聞こえていることが当たり前であることと同じように、私のようなろう者は生まれてから聞こえないことが当たり前であり、自然なのである。故に、どちらが良いのかという優劣的な判断は困難である。お互いの当たり前がたまたま違うだけのことであり、いかにお互いに歩み寄れるかどうかが重要であるように思う。

世界は、新型コロナウイルスの蔓延という未曾有の出来事に見舞われている。ろう者も聴者も自らの命を守るためには、新しい生活様式に順応しつつ、最新の情報を得てそれを理解するリテラシーが必要である。そういう時だからこそ、両者の文化的な背景は異なっていても、命に関わる情報の格差を生み出してはならない。医療の場でもお互いに歩み寄れる方法でろう者のニーズが反映されるよう、本稿が何か手助けになれば幸いである。

文　献

1）木村晴美. 岡 典栄共著. 手話通訳者になろう. 東京：白水社；2019.
2）矢野羽衣子、松岡和美. 愛媛県大島宮窪地区の村落手話（地域共有手話）における二種類のタイムライン. 日本言語学会155回大会予稿集. 2017; 360-365. http://www.ls-japan.org/modules/documents/LSJpapers/meeting/155/papers/p/P-2_155.pdf（引用2021/7/21）
3）松岡和美著. 日本手話で学ぶ 手話言語学の基礎. 東京：くろしお出版；2015.
4）特定非営利活動法人インフォメーションギャップバスター.『医療用語を日本手話で～医療従事者とろう通訳者の協働～DVD』（2020年制作）